

「文理」会通の夢——総研大の改革に臨んで

伊 東 貴 之

国際日本文化研究センター（日文研）をはじめとして、人間文化研究機構に属する各基盤機関の大学院部門は、現在、他の理系の自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の四つの大学共同利用機関法人に属する一六の研究所、並びに、国立研究開発法人・宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所とともに、神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）に本部のある国立大学法人・総合研究大学院大学（略称・総研大）を構成している。また、現状では、人間文化研究機構に属する各基盤機関のうち、大学院を有するのは、国立歴史民俗博物館（歴博）、国文学研究資料館（国文研）、私ども日文研、並びに、国立民族学博物館（民博）の四機関であり、それぞれ大学院の専攻としては、総研大の文化科学研究科の日本歴史、日本文学、国際日本研究、そして、民博のみ、地域文化学、並びに、比較文化学の二専攻を有している。総研大の研究科としては、この文化科学研究科のほか、物理科学研究科、高エネルギー加速器科学研究科、複合科学研究科、生命科学研究科、先端科学研究科の理系の五研究科があって、それらの傘下に、文理を合わせて、全二〇専攻を擁している。詳細については、左記の総研大のサイトを御高覧願いたい。

国立大学法人総合研究大学院大学 (soken.ac.jp)

さて、その総合研究大学院大学（総研大）は、二〇二三（令和五）年四月より、これまでの教育体制を見直し、如上の全ての研究科を統合して、先端学術院・先端学術専攻という一学術院・一専攻に改組されて、その傘下に、現在の各専攻に当たる各コースが存在する二〇コース体制となって、新たに生まれ変わる。但し、学位審査などの必要からも、文化科学・数理情報科学・物理科学・生命科学という、緩やかな四つの領域は残ることになる。此方に関しても、委細は、左記の総研大のサイトを御覧頂きたいが、現在の各専攻の後継となる二〇コースについても、まずは、文化科学の領域、ないしは、人間文化研究機構を構成する基盤機関から見ても、国立民族学博物館（民博）の二専攻（地域文化学・比較文化学）が統合されて、コース名は、人類文化研究となるほか、新に国立国語研究所（国語研）と総合地球環境学研究所（地球研）が、大学院を立ち上げて、日本語言語科学、総合地球環境学というコースをそれぞれ創設する予定である。因みに、前述した四領域のうち、前者は、文化科学と数理情報科学、後者は、物理科学と文化科学というように、文理の双方に跨がる研究・教育領域を担うことになる。理系の方でも、分子科学系の二専攻（構造分子科学・機能分子科学）が、分子科学コースに統合されるほか、先端科学研究科の生命共生体進化化学専攻が、統合進化化学コースに改編されるなど、若干の異同があるが、総計・二〇コース体制として、再出発するとともに、同じく幾つかの領域に跨がるコースが生じるなど、総研大が標榜する学際性や文理融合的な姿勢が、更に顕著に体现される仕儀ともなっている。（――以上、左記サイトを参照）

国立大学法人総合研究大学院大学 先端学術院 (<https://nex20.soken.ac.jp/>)

なお、目下は、この改編を目指して、総研大を挙げて、鋭意取り組んでおり、半ば私事に亘っ

て、甚だ恐縮の至りではあるが、偶々筆者も、昨年来、拜命した文化科学研究科長職のために、及ばずながら、その一端を担っている訳である。もっとも、筆者としても、研究科長職を拜命して早々に、このいわば一研究科構想とも言える、先端学術院・先端学術専攻という、一学術院一専攻への統合という、些か途方もない構想案に接して、率直に申し上げて、甚だ戸惑ったことは、言うまでも無いであらう。何しろ総研大は、幅広く文理の様々な研究分野を包括しており、それが、文理の垣根を越えて、一つの専攻へと統合されるという、壮大な改革である。事実、文科の教員の中には、理系主導の改革という見方も多かつたし、理系の先生方の間でも、この改革案に対しては、様々な意見があり、かなりの温度差があるようにも拝察された。新に発足する学術院の名称に関しても、筆者の記憶が正しければ、当初は、複合科学や先端科学といった呼称も、複数ある案のうちのひとつとしては提起されたものの、現在、存在する研究科の名称とも重なるため、見送られる仕儀となった模様である。

ところで、慥かに「先端学術」という名称は、善かれ悪しかれ、如何にも理系の研究者の方々の理想や願望が、その背景に存するという見立ても、強ち間違いとは言えないであらう。ここで、些か皮肉な物言いを容赦して頂くなら、生粋の(?)文系の筆者などは、「先導」と聞いて、故・古井由吉氏の初期の佳編『先導獣の話』をつい思い浮かべてしまったし、「先導」や「先導」などと称するのは、やはり何と言っても、研究成果のプライオリティー競争を重んじる理系の発想で、人文系や更には藝術系であれば、その内実を問題として、むしろ「前衛」と称することを望む人々も多くおられようし、また、広く文系の場合には、そうした先進性なり、有用性を誇示することを嫌って、逆に殊更に「虚学」であることを誇ったり、社会的にも「後衛」の位置に身を置くことに、かえって存在価値を見出す向きもあらう(一丸山眞男『後衛の

位置から』！)……。

しかるに、筆者自身、様々な会議を通じて、この大幅な改組の理念や実態を少しずつ知り得る立場になってみて、それなりに、そこに籠められた意図を理解することが出来るようになってきた。最もドラスティックな改変は、一専攻への統合ということとも相俟って、現在、各研究科ごとに行われている教授会や専攻長会議が廃されて、葉山の総研大本部と各コースとが、直接にリンクされるようになる点である。このことは、いわばトップダウンとボトムアップとが、双方向的に上手く機能し得ることを目指したもので、それと同時に、現状でも、最前線の教育現場である各専攻改め各コースの自立性や立場を最大限に尊重して、良い意味での現状維持を図ろうとする配慮もある。その意味では、一見、中央集権的(郡県制!?)に見えて、地方分権(封建制!?)にも、意が用いられて、両者のバランスが目指されているとも言えよう。もともと、その中間にある前述した四領域ごとの各領域会議なども含めて、こうした改組が、上手く機能して、改革の実を結ぶか否かは、むしろ実際の運用の如何に係っているとも言えるのである。発足の後にも、様々な微修正などは、必須になるものと思議している次第である。時には、歩きながら考える、ということも、必要な所以である。

以上は、実質的な運用の局面的話であるが、その理念については、如何であろうか? 既に示唆した如く、やはり総研大が掲げる研究・教育上の理念のうち、学際性や総合性、いわば文理融合的な要素も含む、広く領域横断的な研究・教育の推進、また、そうした方向性を担い得る知性の涵養という、見方によっては、やはり途方もない改革案でもあり、途轍もない理想論とも言えよう。因みに、この学際性や総合性に、国際性を加えれば、まさに私ども日文研の理念とも重なるが、日文研の共同研究会においても、先年来のワーキングなどを通じて、いわば文

理融合的な研究姿勢も模索されて、「自然観と人間観」というカテゴリーも案出されたが、その折には、文理の単なる「融合」という考え方や「融通」といった語彙が忌避されて、文理の「相通」という語彙や理念に収斂した次第である。この点に関しては、飽くまでも卑見ではあるが、また、現代では、些か馴染みがないかも知れないが、『易』繫辞上傳に典拠があり、物事が相通じ合い、一緒になった後に、変化するという、「会通」という語彙や概念の方が、より理想とする実態には、相応しいものと愚考している。すなわち、相互の交通とともに、その結果として、一種の化学反応を期待するという意味においてである。

それはさておき、現代においては、地球環境問題や資源問題、持続可能な開発目標といった、人類史上の困難な問題に直面して、最早、反文明的で空想論的な態度では、対処することは不可能であり、自然科学や科学技術の叡智を多分野横断的に総結集すべきことは、言を俟たない。だがそれと同時に、環境倫理や生命倫理などを持ち出すまでもなく、自然科学や科学技術の行き過ぎや負の側面にも留意しながら、それを応用するための人文学や社会科学の知見や賢慮もまた、必須のものと考えられる。また、偶然ではあるが、総研大の理系の場合、総じて基礎科学的な分野が優勢なように思われるが、このことは、その実、人類史的に見ても、諸学問の成り立ちや来歴から鑑みるに、存外、文系との相性も良いのでなからうか?…。ここで、敢えて大風呂敷を広げるなら、「驚き」を純粹な知的探究の出発点と考えたアリストテレスにとつて、自然学や自然哲学を基礎としつつも、哲学や形而上学、人間や社会に関わる政治学や倫理学などは、むしろ一繋がりのものでして、観念されていたし、この点では、洋の東西を問わず、例えば、古代中国の経書の学問観やその後の朱子学の世界観なども、概ねそうした自然と人間社会とを通貫する思惟を共有していた。リベラル・アーツの語源とされ、古代ギリシア・ロー

マに淵源する、いわゆる自由学芸も、中世期においては、神学部・法学部・医学部といった、専門家養成や資格取得を主眼とする学部に進む以前の基礎教養として、広く位置づけられていたが、更に後のバリ大学などでは、こうした在り方に対する一定の批判や反省として、むしろ純粹に知的な探究を旨とする文理学部（文学部と理学部）が創設されたといった、学問史・大史の基礎を振り返っておくこともまた、強ち時代錯誤とは言えまい。

なお、現代の様々な趨勢の中で、些か劣勢にも見える、人文社会科学、取り分け、人文基礎学の存立意義が奈辺にあるかについては、最早、紙幅も尽きており、別の機会（中国社会文化学会HP）に、現代詩人の荒川洋治氏の「文学は実学である」（『忘れられる過去』、みすず書房、二〇〇三年、所収）という美しい文章を引証しつつ、卑見を述べた経緯もあるので、御関心の向きにおかれては、別途、そちらを御参看願えれば、幸いである。（——以上、左記サイトを参照）

中国社会文化学会 (www1.u-tokyo.ac.jp/ASCSCL/)

中国社会文化学会会長挨拶 (www1.u-tokyo.ac.jp/ASCSCL/goaisatsu.html)

（国際日本文化研究センター教授）